

# 1999年8月11日の皆既日食

木村 精二

「3年後、ヨーロッパの大都市を幾つも通る皆既日食が起きます。夏休みの最中に、久しぶりの“文明国日食”です。昨年地震で被災した神戸の知人から、黒い太陽を観測した帰りには親しい友とイタリアでルネッサンスの跡を辿りたい、という手紙を貰いました。会場の皆さんも、ぜひ日食以外の目的も持ち、小グループでお出掛けになる事をお勧めします。ガイコクは初めてという方は別として、今回こそエイジェント主催の団体ツアー等に参加する利点があるでしょうか(まさか今回は、××(先生)ご同行を宣伝文句に使う日食企画屋さんはないでしょうね)。個人手配の方が経済的ですし、自由な旅が楽しめますよ」。去る1月7日、工学院で開かれた日食情報センターの集いで、数分ほど時間をいただいた小生は、こんな前口上で、表記の日食についての概要と思考の一端を話しました。メモなしで良くは覚えていませんが、その内容に少し補足して次に記します。いずれ本誌に、きちんとした予報と天候などの情報が載ると思いますから、この拙稿は斜め読みして下さい結構です。

1963年の北海道日食から2サロス目、今回の皆既帯は、大西洋上で日の出と共にスタートし、最初の陸地はイギリスのシリー諸島(既に僅かしかないホテルは全部予約済!)、次いで同国の西部コーンウォール地方(中心線上のペンザンスなどで皆既食の継続時間122秒、太陽高度46°)を横断してイギリス海峡へ抜けます(ロンドンでは97%の部分食)。

ヨーロッパ大陸に入ってフランス北部(パリでは99%)からルクセンブルグ(同名の首都は皆既帯内に入り継続時間70秒)、次いでドイツ南部を通過(アウグスブルグが中心線上で139秒、シュツットガルト135秒)、オーストリア(ザルツブルグ118秒、首都ウィーンでは99%)、ハンガリー(首都ブダペストも99%)、旧ユーゴスラヴィヤの北西端を経てルーマニア南部に入ります。中心線に位置する同国首都ブカレストは皆既時間142秒、高度59°で、この近辺が食の最大(皆既帯の中が最も広いのは黒海上で112キロ)です。続いてブルガリアの北端をかすめて黒海へ、トルコに上陸しシリアとイラクの北端、イラン、パキスタン、さらにインド中央部を横断、ベンガル湾で日入りと共に終わります。

ヨーロッパでの黒い太陽というと、最近ではフィンランドの一部で日の出直後という条件の劣った'91年7月日食を思い出しますが、欧州中央部で良い条件の皆既日食は、'61年2月以降初めて、イギリスでは'27年6月(ちょうど4サロス前)以来72年ぶりですから、後者ではハレー彗星ほど稀な現象といえましょうか。

筆者はコーンウォール(前出)生まれの友人から、知り合いの宿(ペンザンスのトレモント・ホテル)を予約するからいかがかと誘われ、もっけの幸いとばかり、お願いしてしまいました。上述のとおり、天文学的条件は決してすぐれず、BAA(英国天文協会)のジャーナルに載った解説によれば、気象条件も良くありませんが、「またイギリス?」と呆れられながら、二十何回目かの訪英行きになりそうです。上記の集いが終わってすぐ、「子供が間もなくイギリスに留学します。3年後も滞英中のはずで、そのころ私も訪ねて、観望して来ますー」とおっしゃった下さった方、ぜひ彼の地でお会いしましょう。